1 洵　　アダチUKIYOE大賞 第10回 大賞受賞者作品　春高楼の花の宴

(32.5×23.0)

普段人物画を中心に制作していますが、本作では風景画に挑戦しました。私の故郷、福島県会津を代表する城址「鶴ヶ城」を描いています。桜の季節にこの方角から眺めるお城が一番好きです。お城の赤瓦と桜の調和が美しいのでぜひ一度訪れていただきたいと思います。この眺めの場所を探していただければ、題名を荒城の月の一節にした理由も、きっと見つけていただけると思います。　洵

【略歴】

福島県会津生まれ・在住のイラストレーター。
日本画のような和風な雰囲気や、どこかノスタルジーを感じるような絵を中心に制作している。全てパソコンを使ってのデジタル作画で、効率性や表現の幅広さなどのデジタル制作の良さを活かしつつ、手描きの柔らかさや日本画独自の質感や風情を表せるような作品を目指している。
主に着物・日本髪など日本文化に関係するものや時代物、歴史系の絵を得意とし、月刊文芸誌の小説挿絵、児童書・歴史学習書籍の説明イラストなど書籍の仕事を中心に、電子書籍の扉絵、パンフレットや学習テキストのカットイラストなど幅広く活動中。
https://june06cat.com/

2 長友 由紀　　アダチUKIYOE大賞 第10回 優秀賞受賞者作品　東京駅地中図絵

財団および技術者の方々の工夫のお陰で、完成を迎えたことに感謝しております。私が制作に用いている友禅染めは、江戸時代に最も発展した技法です。初めは武家や公家のみで用いられていた友禅の着物が、江戸の経済の発展に伴って、町人の間で流行するようになったと云います。同じく江戸の人々の暮らしを彩って来た浮世絵にも、友禅の魅力に通じるものを感じます。これからも、現代の人の生活に寄り添う作品を目指していきたいです。　長友由紀

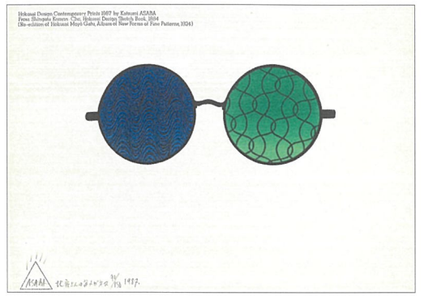
(28.0×22.9)

【略歴】

1991年　神奈川県生まれ
2014年　東京藝術大学 美術学部工芸科染織専攻　卒業
2015年　グラスゴー美術大学　コミュニケーションデザイン科　交換留学
2017年　東京藝術大学 美術研究科工芸専攻染織領域　修了
2019年　金沢卯辰山工芸工房　修了

<個展>
2017年　「海のざわめき」ギャラリー U、東京
　　「深海」ギャラリー澄光、東京
2018年　「紋様狂詩曲」Shonandai Gallery,東京
　　「東京模様」アートモール、東京

3 浅葉 克己　　北斎さんの色眼鏡 2



浅葉克己氏は、日本を代表するアートディレクター。本作は、葛飾北斎が染小紋のために描いた絵手本「新形小紋帳」に取材して、浅葉氏が制作した作品。北斎・老人・眼鏡というユニークで楽しい発想をもとに、「北斎模様画譜」の各頁に並ぶ2つの円形をメガネのレンズに見立てている。薄いピンクの暖かい色調に、モノクロの北斎模様を青色、緑色で彩色し、ぼかしによって立体感を表現した、木版技法の特徴が発揮された作品である。　(26.0×37.0)

4 鈴木 春信　　雪中鷺娘

錦絵の創始者として知られる鈴木春信が描いた美人画。娘に姿を変えた白鷺の精が、雪のように深々と降り積もる恋心に苦しみ身を儚む、長唄の舞踊「鷺娘」の物語を題材にとっており、鷺娘と当世風の娘の姿を重ねあわせて描き出している。傘を差し水辺にたたずむ純朴で無垢な娘の白い振袖には、空摺によって立体的な菱紋様がほどこされている。上品でお人形のような顔立ちの幻想的な「春信美人」を堪能できる作品である。　(29.7×21.8)

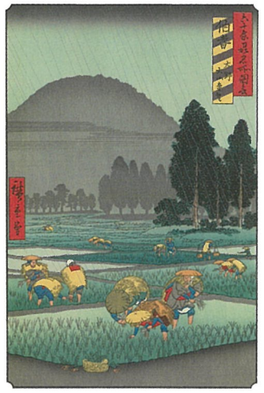
5 歌舞妓堂艶鏡　　二世中村仲蔵の松王丸

歌舞伎堂艶鏡は、同時代に活躍した写楽同様、作画期は一年足らずで謎の多い絵師であるが、その作風は極めて高い画格を備えている。艶鏡は歌舞伎の人気演目「菅原伝授手習鑑」に登場する三兄弟をそれぞれ作品に残しており、本図はその次男である「松王丸」を描いた一作。への字に強く結んだ唇や眉を寄せ見栄を切る凛々しい表情は、舞台に立つ役者の特徴を極めてよくつかんでおり、役者似顔絵としての形式美に大変優れた作品である。　(36.3×26.4)

■ 作品送付方法

作品は台紙付で発送いたします。額縁付作品をご希望の方は¥10,000を同封の郵便振替でご送金ください。
（送料は当財団で負担いたします。）

6 歌川 広重　　伯耆 大野大山遠望



全国の名所を描いた、広重「六十余州名所図会」の一図。「出雲富士」とも呼ばれる大山を背に、家族で田植えに勤しむ農家の素朴な日常風景をとらえている。近景は人々の装いや表情まで細かく描かれているが、遠景の大山や木々は輪郭線のないシルエットで表現され、霧雨に霞む見通しが巧みに表現されている。晩年期の広重の卓越した表現力が発揮された傑作である。(34.5×22.6)

7 葛飾 北斎　　駿州大野新田

大野新田は東海道の原から吉原の宿場に向かうあたり。大きな富士山と、芦を積んだ牛を引き連れ歩く人々を描く、日常風景をとらえた作品である。藍と緑のぼかしで広い沼地が表され、右端には2つの浮島が描かれる。古くから富士見の名所とされた「浮島原」の清々しい朝の風景を、淡い紅と藍のぼかしによって見事に表現した一図である。
(26.6×38.8)

8 歌川 広重　　葉ごしの月

広重の代表作「東海道五拾三次」と同時期に描かれた「月二拾八景」の一枚。二拾八景としながらも、確認されているのは本図を含めて二図のみである。大きな満月が流れ落ちる滝や散りゆく紅葉の枝葉を照らす情景は、叙情的な秋の風情に溢れている。縦長の画面を活かした滝の高低差や、月の明るさを和紙の肌と藍色のぼかしで巧みに表現するなど、画面の隅々まで広重のこだわりが感じられる名作である。
(38.5×17.5)